▼エッセイ

パワフルママの、ほのぼのエッセイ

RURIKOの部屋

RURIKO'S ROOM

Vol.6

感謝すること イコール幸せの処方箋

２０１０年が始動しましたね。新たな夢に向かって一歩を踏み出した人も多いことでしょう。

マイテーマは「感謝」 常に感謝の精神を持って生きる

今年のマイテーマは、「感謝」です。どんな事にも感謝の心で手を合わせていこうと思っています。こうして今の自分があるのも、出会うべくして出会った様々な人たちに支えられているのだと実感します。

年明けに我が人生の師の元を訪ねました。華道文化を海外へ広めた著名な方ですが、仕事がとりもつ縁で親交を深めさせていただいています。

現在は第一線から退き、自然界と一体の境地で穏やかに余生を過ごされていますがソウルメイトでもあるその方は、元旦にカトリック教徒として洗礼を受けられたそうです。信仰が人の心を救うか否かで様々な宗派を研究され、心の旅を続けていらっしゃったようですが、数年前から教会に通い祈りを捧げるうちクリスチャンとして生きる決意をされたようです。

運命に翻弄されるのではなく、身にふりかかる全ての出来事を、神に与えられた試練だと受けとめ神と対峙していきたい…と話されました。

私たちは、世界でどこよりも自由で平和な国に育ち、当たり前の幸せにマヒして生きています。思想も宗教もそれぞれ。神の存在など無縁な世界で生きている人がほとんどでしょう。でも無神論者であっても、いざ土壇場では自然と神にすがり祈るものです。

外国において神の存在は超越的対象で、人々の暮らしと密接に繋がっています。朝目覚めた時に、食事をいただく時に、平和な一日を終えたことに、そして何より生かされている奇跡に、感謝して手を合わせる。日常繰り返される不条理な事をも否定せず一歩ひいてみると、違った側面から己のすすむべき道が見えてくるものです。

歳を重ねるごとに生への執着は少しずつ色を変えてきました。晴れのち曇り、ときどき雨、嵐…自然も、人生もまた同じようなものです。逆境の時にどう生きるかが問われるのだと思います。亡き父の残してくれた言葉…「冬は必ず春になる」を信じ、常に感謝の精神でいきたいと思っています。

文=RURIKO
るりこ●1953年生まれ、もうひとと花咲かせたいアラ還(熟女って言ってェ～)。生涯現役を目指し、某ローカル紙記者として活躍(？)中。趣味は、映画鑑賞・散策・写真撮影。生き方は超不器用人間。弱者の声に耳を澄ますヒトでいたい！エッセイで元気を発信したい。自分へのメッセージでもあるんです。

空想80%のショートストーリー

透明な原稿用紙

No.6

＃煙雲――――

空に現れた排水溝に、雲がゆるやかな渦を巻いて流れ込んでいる。午後4時の南の空がそんな感じだったので、車を運転しながらちらちらと眺めていました。風は昨日と比べものにならないほど強く、捨てられたビニール袋がシューティングゲームに出てくるゾンビのように、こちらめがけて跳びかかってきます。俺はそのたび急ブレーキを踏んだので、せっかちな後続ドライバーは猛スピードで俺の車を追い抜いていきました。

街の中心から少し西に大きな川があり、川縁では、穂を陽に透かしたススキが風に殴られ雨の日のワイパーよろしく右に左に動いています。遠くに見える鈍い銀色の煙突は今日も黙々と煙を吐き出しています。

ススキと煙突を交互に眺めているうち、ふと違和感を感じました。が、何がおかしいのかすぐに特定することができません。まるで巧妙に作られた日曜の新聞のまちがいさがしです。今度は集中して風景を観察しました。

違和感の正体は、煙突の煙でした。あろうことか、風上に向かい煙が流れているのです。強風に逆らい、ふるふる震えながら進む煙は、幼い頃に見た死にかけの尺取虫そっくりでした。

＃容赦なく――――

リップクリームを購入したんです。唇が荒れ荒れで。さっそく塗ってみると、唇いっぱいに潤いを感じました。唇から芽が出て、花が咲きました。ミツバチが集まってきて、ほがらかに踊ります。唇はハチミツで覆われました。甘い匂いに誘われて、おなかを空かせたクマさんがやってきました。僕はクマさんにあいさつしました。「やあ、くまさん、いい天気だね。こん…」。あいさつの途中でクマさんは、僕を思いっきり殴りました。僕は地面に倒れました。真っ赤な血がどくどくと流れています。僕はもうじき死んでしまうのです。「まだやりたいことがたくさんあったのに…」。悔しくて涙が出てきました。涙の粒が地面に落ちると、あたりがぱっと光り、神さまが現れました。「ああ、神さま、僕を助けに来てくれたのですね」。神さまの手をつかもうとしたら、神様はすっと消えてしまいました。僕はクマさんにもハチミツをわけてあげようと思ったのです、神さま。手が冷たい。もう動けません。さようなら。

文=メランコリカ
めらんこりか●1972年生まれ。放浪の旅？を経て、今は文章に携わる仕事をしている。多感な時期に音楽の洗礼を受け、部屋はCDの山。未だロックな生き様に憧れる、未婚のアラフォー男。

COLUMN CAFE コラム カフェ

Column.9

「何でも屋かスペシャリストか」

手元に新聞記事の切り抜きがある。見出しは「イオン、『よろず屋』志向を転換」だ。イオンが傘下の大型スーパーを大幅に改革して「新型スーパー」へ転換するのは、消費者の好みが多様化し「何でもそろう「よろず屋」的な売り場スタイルが支持されなくなってきたためだ、と論じている。

高度経済成長期からバブル時代にかけて急成長した総合スーパーだが、長期不況に陥っている現在は、「ユニクロ」を代表するような専門店が勢いを増している。専門店の魅力は、「個性的で良質な商品」の提供。「なんでもそろうが、どこにでもある商品」を売る総合スーパーに、消費者は魅力を感じなくなっているということだろう。

サッカーの世界でも、複数のポジションをこなす「便利＝よろず屋的なプレイヤー」より、突出した特徴や能力を持つ「スペシャリスト」の方が、案外、重用されることが多い。「器用貧乏」という言葉が示す通り、「なんでも屋」という特徴が、逆にマイナスの効果をもたらすことが多々ある。

「なんでも」を看板に掲げるにしても、何か一つくらい「これだけはどこにも負けない」というストロングポイントを作っておくことが重要だ。人の持っていない技術や知識は、それだけで貴重な武器になると同時に、自らの仕事に対する自信にもつながることだろう。多様化する現代では、各分野のスペシャリストがそろうことで「なんでも」を実現している。それを独り占めしようという総合スーパーのあり方は、少々虫が良すぎるようだ。（鹿男）

ロスタイム

コレクションにはまる人は多い。時計やアクセサリー、フィギュア、絵画。最近は、御菓子のおまけ（食玩）やカードを集める大人も多い。

集めたコレクションを眺める時が、コレクターにとっては至福の時。興味のない人にしてみれば「そんなもの」と思うような品物でも、本人にとっては大事な大事な宝物だ。

物が集まり、空白を埋めていくという作業は、楽しい。先日、１２０枚入る名刺ホルダーを買った。今は、この名刺ホルダーを自分で作った似顔絵名刺で埋めることをコレクションにしている。全部埋まったら、それはそれは壮観だろう。問題は、それがいつになるのか、ということだ。（直）

進化するニュースレター
東毛見聞録（とうもうけんぶんろく） ほぼ月刊 ゼロトップ通信

編集長：香山 直　ライター：赤彗堂鹿男　RURIKO　メランコリカ　九十九十一　四方美人　えどがわはるみ　藤果　和木　隆

編集・制作・発行：ゼロトップ デザイン ワークス
〒373-0013
群馬県太田市市場町457-3 TEL.050-7525-6023 FAX.0284-71-4157
e-mail:nao@zero-top.com web:http://www.zero-top.com